

作成番号:0281

一般社団法人 日本侵襲医療安全推進啓発協議会 「会員向けメールマガジン」

号数:2025-281

内容:母乳育児、即ち腸内細菌叢には子どもの血圧を下げる効果がある

出典:Infant Gut Microbiota and Childhood Blood Pressure: Prospective Associations and the Modifying Role of Breastfeeding.

Journal of the American Heart Association. 2025 Mar 04;14(5);e037447. doi:

10.1161/JAHA.124.037447.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/40013588/>

腸内細菌が、特に母乳で育てられた子どもの血圧を改善する可能性があるか否か、米コロラド大学の研究者らによるこの研究の詳細は、「Journal of the American Heart Association」に2月27日掲載された。

デンマークの小児喘息に関する研究(Copenhagen Prospective Studies on Asthma in Childhood 2010)に参加した526人の子どもを対象に、乳児期の腸内細菌の多様性や組成と小児期の血圧との関連と、その関連に母乳育児が与える影響について検討した。生後1週間、1カ月、1年時点に対象児から採取された便検体の分析により腸内細菌に関するデータを得た。また血圧は、3歳時と6歳時に測定した。解析の結果、全体的には腸内細菌の多様性と血圧との間に関連は認められなかったが、母乳育児の期間が関連に大きく影響することが示された。具体的には、腸内細菌の多様性が高い場合、母乳育児期間が6カ月以上だった子どもでは血圧が低くなる傾向が認められたのに対し、6カ月未満だった子どもでは血圧が高くなる傾向が認められた。また、生物の多様性の指標であるシャノン指数が1上昇するごとに、母乳育児期間が6カ月以上だった子どもでは6歳時の収縮期血圧が1.86mmHg低下していたのに対し、6カ月未満だった子どもでは0.73mmHg上昇していた。

この研究結果は、腸内細菌叢の最適な発達のためだけでなく、生涯にわたる心血管の健康を改善するためにも、乳児期を通して母乳育児を促進することの重要性を示唆している。

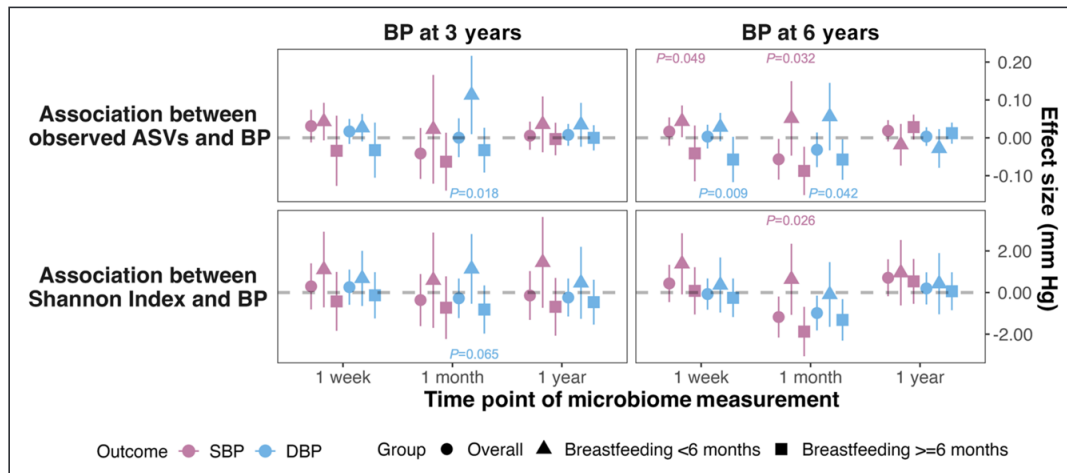


Figure 1. Prospective associations between infant gut microbiome α diversity indices and child BP at 3 and 6 years, overall and by breastfeeding duration.

The effect sizes and 95% CIs are interpreted as the changes in BP per 1-unit increment in α diversity indices. Models were adjusted for maternal diet score during pregnancy (continuous), diagnosis of preeclampsia (yes vs no), infant birth weight (kg), gestational age (wks), and breastfeeding duration (d) at the time of microbiome measurement (for overall estimates only). P values shown on figure indicated statistical significance for interaction. ASVs indicates amplicon sequencing variants; BP, blood pressure; DBP, diastolic blood pressure; and SBP, systolic blood pressure.